学生が考える

―学生にとって「よりよい授業」に必要な５つの要素―

Created by　MOCA

関西大学　奥村百香

井上優

岡本碧梨

中谷汐里

顧問 山田剛史(教育推進部 教授)

発行日

－2023 年 3 月 14 日－

レポート作成にこめた想い

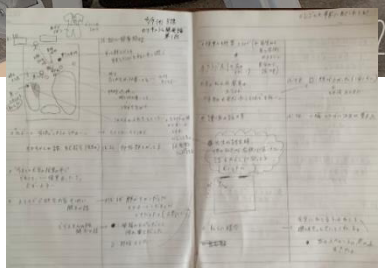
「もっと大学で学びを深めたい」

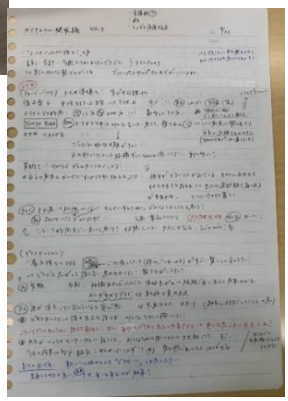
「もっと成長したい」

私たちのために、学習者（わたしたち）主体にしたい。

まずは、教職員に学生のリアルな声を届け、授業をアップデートしてほしい。

２０２２年度「カリキュラム開発論」授業の様子





フィールドノートの一部

MOCA は、関西大学の教職課程科目「カリキュラム開発論」の授業に、2021 年度は受講生として、2022 年度は参加観察として関わりました。授業における教員の工夫や、それに対する学生の反応などについてフィールドノートに記録したり、授業中や授業後に教員や学生と直接的にコミュニケーションをとったりしながら、授業の様子や学生の様子を観察しました。

また、学生の声を直接聴くために、私たちは 2021 年度・2022 年度「カリキュラム開発論」の受講生 10 名を対象にインタビューを行いました。

そして、授業観察から見えてきたことや、学生の声、自分たちがこれまで経験してきた大学の授業のことを踏まえながら、学生なりに「よりよい授業」の在り方について考えました。「何が」よい授業なのか、「どうして」よい授業なのかということにこだわり、議論をしました。

このレポートでは、「学生にとって『よりよい授業』とは何か」ということについて、学生自らが考えたものを、形にしました。

○インタビュイーの基本情報

名前	学年 （2022 年度時点）	性別	所属	授業受講時期	進路 （インタビュー時点）	インタビュー 日時・所要時間・場所
A さん	3 年生	男性	文学部(国語国文学専修)	2022 年度	大学院進学	2022.9.22(木) 60 分程度 @空き教室
B さん	4 年生	男性	文学部(日本史・文化遺産学専修)	2021 年度	就職	2022.9.29(木) 60 分程度 @食堂
C さん	4 年生	女性	文学部(教育文化専修)	2021 年度	就職	2022.9.29(木) 90 分程度 @食堂
D さん	4 年生	男性	文学部(教育文化専修)	2021 年度	就職	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
E さん	4 年生	男性	外国語学部	2021 年度	就職	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
F さん	3 年生	男性	文学部(哲学倫理学専修)	2022 年度		2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
G さん	4 年生	男性	文学部(国語国文学専修)	2022 年度	大学院進学	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
H さん	4 年生	女性	文学部(初等教育学専修)	2021 年度	就職	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
I さん	4 年生	女性	文学部(国語国文学専修)	2021 年度	就職	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE
J さん	4 年生	女性	文学部(教育文化専修)	2021 年度	大学院進学	2022.9.21(水) 90 分程度 @KITENE

○インタビューの詳細

当初の予定では 2022 年 9 月 21 日(木)に 90 分程度、関西大学のアクティブラーニングルーム(ＫＩＴＥＮＥ)でグループインタビューを行うつもりでした。

しかし、授業やプライベートの予定等の関係で、インタビュー協力者全員が同日程で参加することが難しくなりました。そこで、9 月 21 日(木)に参加できたインタビュー参加者はＫＩＴＥＮＥでグループインタビューを実施しました。他の参加者は別途日程を調整し、1 対 1 でインタビューを実施しました。

なお、9 月 21 日(木)のインタビューについては、以下のようにグループを組み、90 分程度、インタビューを行いました。

《9 月 21 日(木)のグループインタビューの形式》

・Dさん、Ｅさん＋インタビュアー2 人(メイン・サポーター)

・Ｆさん、Ｇさん＋インタビュアー2 人(メイン・サポーター)

・Hさん、Ｉさん、Ｊさん＋インタビュアー1 人

○インタビュー内容

［カリキュラム開発論に対する項目］

・「カリキュラム開発論」の授業の良かったこと、改善してほしいこと

・*TsuyoTube について［良かった点・改善点・アイデアなど］

・オープンチャットについて［参加度・理由など］

・この授業をきっかけに変化したこと

［進路・考え方・生き方など］

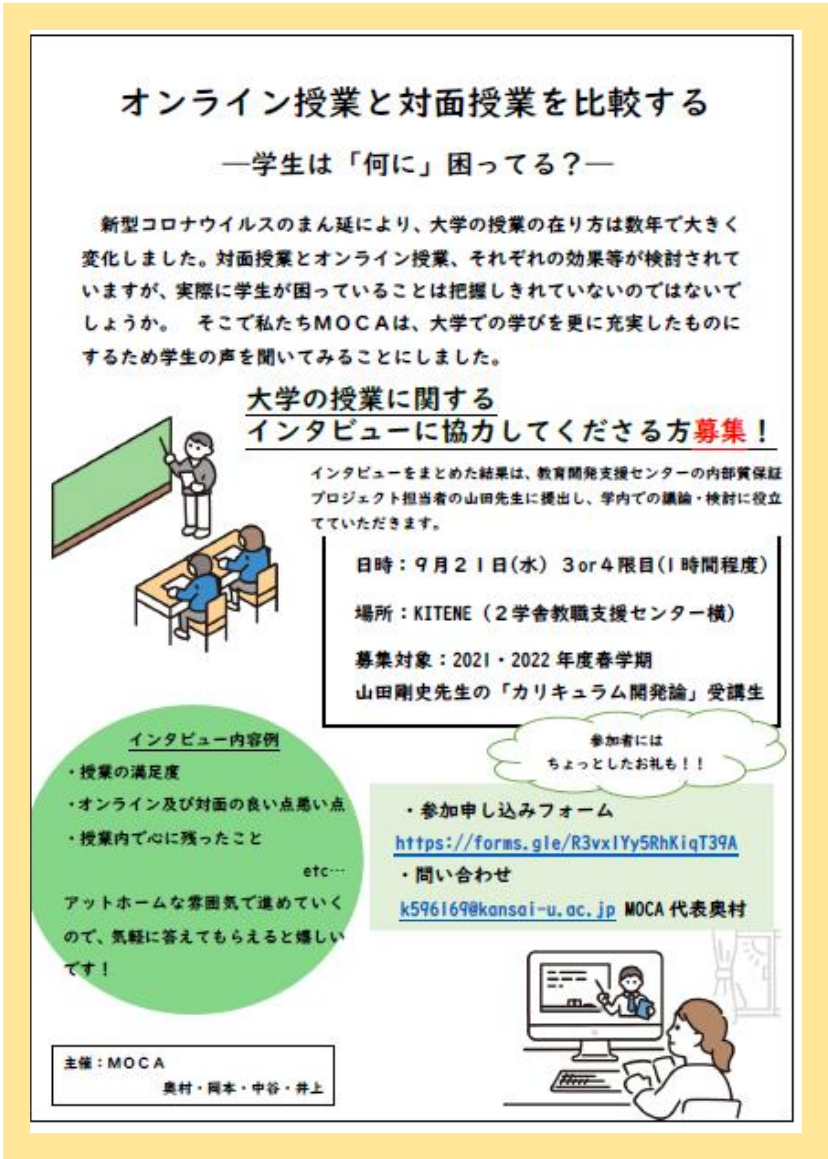
［大学授業全体に対する項目］

・大学の授業全体を通しての満足度(対面・オンライン)

・大学の授業への要望や改善点など

＊TsuyoTube

学生が書いた振り返りの一部をピックアップし、教員のコメントを付けてまとめたものです。「カリキュラム開発論」の授業で用いられた、授業者オリジナルの教材です。本レポート 11･12 頁に詳しい説明があります。



オンライン授業と対面授業を比較する

―学生は「何に」困ってる？―

新型コロナウイルスのまん延により、大学の授業の在り方は数年で大きく変化しました。対面授業とオンライン授業、それぞれの効果等が検討されていますが、実際に学生が困っていることは把握しきれていないのではないでしょうか。　そこで私たちＭＯＣＡは、大学での学びを更に充実したものにするため学生の声を聞いてみることにしました。

大学の授業に関する
インタビューに協力してくださる方募集！

インタビューをまとめた結果は、教育開発支援センターの内部質保証プロジェクト担当者の山田先生に提出し、学内での議論・検討に役立てていただきます。

日時：９月２１日(水)　３or４限目(１時間程度)

場所：KITENE（２学舎教職支援センター横）

募集対象：2021・2022 年度春学期
山田剛史先生の「カリキュラム開発論」受講生

参加者には
ちょっとしたお礼も！！

インタビュー内容例

・授業の満足度

・オンライン及び対面の良い点悪い点

・授業内で心に残ったこと

etc…

アットホームな雰囲気で進めていくので、気軽に答えてもらえると嬉しいです！

・参加申し込みフォーム
https://forms.gle/R3vxIYy5RhKiqT39A

・問い合わせ
k596169@kansai-u.ac.jp MOCA 代表奥村

主催：MOCA
奥村・岡本・中谷・井上

学生にとって「よりよい授業」に必要な５つの要素

－インタビューで聴き取った学生の声をもとに、私たちで議論し、学生にとって「よりよい授業」に必要な要素を 5 つにまとめました。授業に対する学生のリアルな声も一部紹介します。もちろん一部の学生の声ではありますが、これから紹介する 5 つの要素が、先生方の授業をアップデートするための材料になれば、という想いを込めてお届けします。

【５つの要素】

1.心理的安全性を保証する

安心して学びに向かうための良い関係性・雰囲気づくり

2.双方向性を取り入れる

先生と学生のコミュニケーション

3.多様性を取り入れる

学生同士のコミュニケーション

4.思考をする場面を組み込む

学生が自ら考えを深める時間

5.授業展開を工夫する

学生の反応を考慮した上での授業内容と展開の吟味

1.「心理的安全性」を保証する

授業で学生がよく学ぶためには、物理的環境を整えることはもちろん、先生と学生、学生同士で良い関係性・良い雰囲気をつくることも大切です。環境・雰囲気づくりは学びに向かうための土台になります。学生の中には、「熱心に学ぶ姿を見せると、周りの学生から『意識高い系』だと思われるのではないか」「間違ったことを言ってしまうのは恥ずかしい」というような、対人関係への不安を抱えている人が存在します。不安を抱えたまま授業が進んでいけば、学生は授業に関与することを諦めてしまいます。結局「単位さえとれればいい」、という思考になってしまうのです。一生懸命学ぼうとしなくても、授業に真剣に取り組まなくても授業に出席さえしていれば単位がとれるからです。授業における対人関係の不安から身を守ろうとする気持ちは、学ぶ意欲よりも勝ってしまうのです。この不安を取り除き、誰もが気兼ねなく自分の考えを言うことができ、異なる意見や想いを受け入れる雰囲気をクラス内につくること、つまり心理的安全性を保証することが必要です。心理的安全性があることにより、学生は安心して学びに向かうことができます。

心理的安全性を授業で保証するためには、教員・学生それぞれの心理的柔軟性(状況・立場・文脈に応じて、自身の言動をより役立つように切り替えられるしなやかさ)が不可欠です。学生は教員に対して、壁を感じており、先生に対して心理的に距離感を抱いています。学生は一人の大人として先生を見ています。先生の何気ない言葉が、先生と学生との心の距離を広げてしまうこともありますし、反対に、学生の心に安心感や学びへの前向きな気持ちを育むことにもつながったりします。よりよい学びと成長の土台である心理的安全性は、教員と学生の相互作用により育まれます。

学生の声ーインタビュー調査からー

- それなりに(授業を受けている)人数いてるけど、(先生が)一人ひとりと喋ってくれたりすること多くて。発表の場というか、(学生の近況報告を聞いて)何があったかみたいな感じで、一人ひとりとこう、お話しして一人ひとり見てくれてる感じで。かなりあの(授業の中で)発言もしやすいですね。模擬授業もしやすい良い雰囲気だなって思いますね。(A さん)
- 対面でグループディスカッションがあった時に、 ちゃんとチームビルディングみたいなのをしてたような。仲良くなりましょうみたいなところから始めてたから、ちゃんと喋れるみたいなのがあったんだろうなっていう。(D さん)
- 今まで 1 人で教育について、ちらっと考えてっていうことしかしてなかったけど、フィードバックの場を与え貰ったり、いろんな人と交流することで「教育について考えてもいいんだ」っていうのが一つ自分の中で発見で。考えていい。それから発信してもいい。っていうことが分かったので、もっとそういうことしたいなーと言う感覚はあり。(G さん)
- 「どうせ君ら専門じゃないんやろ」って思ってるんやろなみたいな。「一生懸命説明したところでみんなそんな興味ないやろ」みたいな。それを最初から決めつけてるんかなって思う。(H さん)
- （先生の）言葉遣いっていうかさ。これだけ多様性多様性って言ってるんやから、いろんな考え方がある中で自分の考えだけを一つ信じちゃうっていうのが、学生にとって負担になってるっていう事もあるかなって思った。(I さん)

2.「双方向性」を取り入れる

学生は、対先生・対学生とのコミュニケーションを大切にしたいと思っています。その中で、先生と学生とのコミュニケーションを、教壇を挟むという構図から「双方向性」とここでは呼びます。学生にとって「よりよい授業」に必要な要素の一つに、この双方向性を挙げます。

先生に一方向的に授業を進められると、学生の存在が無視されているように感じてしまいます。学生の意見や考え、思いなどを聴き、リアクションを見ながら授業を進めてほしいと、学生は感じています。学生を意識した授業が行われると、学生は授業に参加している実感が増し「もっと授業内容について先生の話を聴いてみたい」「発言をしてみよう」という気持ちになります。

先生から一方向的に、正しいとされることを教え込まれるのは、学生は考える余地がなく、押しつけられている気持ちになり、疑問があっても先生に対して何も言えなくなってしまいます。頑張る気持ちも阻害されてしまいます。例えば、事実や理論を教えなければならない場面はあります。そのような時に、事実のみを言うではなく、一度学生に問いかけてみることで学生の頭を刺激することができます。さらに学生の意見を聴くことで理解度を把握することもできます。

学生も一人ひとり、自分の考えや思いをしっかりと持っています。頑張ろうとしている学生もいます。授業に、学生をどんどん巻き込んでいってほしいです。

学生の声ーインタビュー調査からー

- 教職とかの一方的な授業は嫌ですね(笑)。講義形式の授業は、うわぁーって思いますね受けてて。高校以前の授業と変わらないっていうのもありますね。加えて疑問を持つように作られてないので、一方的にこれはこれ、みたいな感じで。眠くなりますし、聞いてて。(A さん)

- 話しながら授業を進めていってくれる(先生もいる)。例えば「確かにそういう考えもあるよね」「確かにそうだね」みたいな。でも(そうではない)先生は「いや私が言ってることが正しい」って一方通行な授業やから、「こんな授業いつまでやっとんな」みたいな。双方向の授業が楽しかった。(E さん)

- 知識習得のための授業も聞いてるだけで満足するけど、「知恵の授業」ってゆうか、技術や考え方とか、そういう対話で培っていくものっていうのになると、圧倒的です。(F さん)

- 大学ってさクラスがないやん。だから余計に、向き合ってる感じが得られない先生ってすごい苦手に思っちゃう。(J さん)

3.「多様性」を取り入れる

次に、学生と学生との関わりを、ここでは様々な人と関わるという点に着目し「多様性」と表現します。この多様性も、学生にとって「よりよい授業」に必要な要素の一つだと考えます。

学生は、いろいろな人のことを知りたいと思っているし、自分とは異なる考えや価値観に対して柔軟さを持っています。他人のことを受け入れたいと思っています。ですが、完全に受容的な素地が備わっているわけではありません。そのようなときに多様な人や考えに触れることはその素地の育成に必要です。その点で、授業は、いろいろな人と交流し、視野を広げることができる絶好の機会です。他の学生との学び合いを通して、新たな視点や気付きを得ることができ、自分の中で学びを深めることにつながります。

自分の頑張りが他の学生に刺激を与えることもありますし、反対に、他の学生の頑張りから刺激を受けて学びへのモチベーションが上がることもあります。多様な学生と多様な考えや意見を交流する場・機会を授業の中に設けてほしいです。

学生の声ーインタビュー調査からー

- 俺はその時には公務員になりたいと思ってて教員にはあまり興味なかったけど、意識高くなかったけど、意識高い人がおったりとかいろんなバックボーンを持ってて「こうなりたい」「こういう授業をしたい」と 思っとる人がおって何か刺激になったなあと思う。(B さん)

- 少人数授業で、他の人の意見も知れるみたいな。それに対する先生の意見みたいなのもあった授業が良かった。(C さん)

- 中高もさ、高校になって新しい人と触れ合うみたいなのがなかったからさ、中高一貫やったからさ。(大学に入って)そこでなんかいろんな人と触れ合うみたいな。授業でいうとめちゃくちゃ賢い人とかさ、教授なんかまさにそうやんか。そんな人の話を聞くみたいなのはちょっと頭の体操になったんじゃないですか？笑。(D さん)

- 1 回生の時の教職は講義系が多かったから、(逆に)自分の意見を人に伝える授業が楽しかったし、人の意見を聞いてああそうやなあとか思ったりするの、なんかグループワークとかが楽しかった。(J さん)

4.「思考する場面」を組み込む

授業の中で、学生が自分の頭で考える時間をつくってほしいです。講義内容を詰め込まれたり、先生のしゃべりだけで授業が淡々と進んだりすると、学生の思考は止まってしまいます。考えたことを他の人に話して言語化したり、メモや振り返りなどを自分で書くことによって、頭の中を整理・可視化したりするような場面が、学生の学びを深めるためには必要です。

授業最終回のテストのような一発勝負で学生の学びを測るのではなく、毎回の授業で学びを積み重ねていくことによって学生の学びを深める方向に転換してほしいです。継続的に地道に学び続け、思考をし続けることによって、単なる記憶が確かな知識になり、学生の思考を豊かにすることにつながります。学生が自分一人で思考をする時間も必要ですし、他の人と交流しながら思考を深める時間も必要です。

インプットの時間だけでなく、学生が頭や心、身体を使いながらアウトプットをする時間を授業のどこかで作ってほしいです。

学生の声ーインタビュー調査からー

- (自分が今まで受けて良かった授業は)一方的な知識の教授じゃなくて、なんか相談する時間だとか、自分の考えをまとめてアウトプットできる時間があったので頭の使う場所を変えれるというか。良いリフレッシュになったので個人的には。普通に授業を受けるよりかは、頭に入ったこととか、身に入ったこともあるなーと思いましたし。(A さん)

- 僕はフィードバックの時間が結構好きでした。自分の考えを整理できてたので。(授業中は)自筆ノートを作ってたって感じですね。自分が考えたこととか、疑問に思ったこととか、トピックに対して自分が疑問に思ったこととかを、後で見返してふりかえりに使えるので、そういう風に利用してましたね。(A さん)

- (いままで受けた)授業でいいなって思ってることが、1 個挙げるとすれば、すごいこう揺さぶられる発問があるということ。授業の中でね。それを先生が、「じゃあこれについて考えてください。」っていう形の発問もあるし、前回の復習とか色んな人のコメント紹介という形で、頭揺さぶるような疑問提起・問題提起があるのがすごい良かったな。発問の形で出された場合には、グループになって話し合ってねってことに…まあその形もすごく良かったなと思っていて。(G さん)

5.「授業展開」を工夫する

「よりよい授業」のためには、取り扱う内容と展開が吟味されていることも重要だと考えます。限られた時間の中で全ての内容を言い切ることは出来ません。そこで、何に焦点を当ててどの項目を取り上げるかは整理されなければ、授業を受けている学生は整理されていないものを受け取ることになり、わからなさを感じることになります。

また、内容は絞られていても、順序立てがうまくなされていないと、説明が前後してしまいそれを追うことに集中してしまうあまり、内容の定着が不十分になることも考えられます。

学生は自分が興味があることや専門的なことについてしっかりと学びたいという気持ちを持っています。授業の流れが順序立ててあり、論理的・具体的・実践的な授業内容であれば、学生の理解が進み、知的好奇心が刺激されます。思考の質も高まります。しかし、計画性があまりない授業では、学生は「何のためにこの授業を受けているのだろう」という印象を受け、「やらされている感」を抱いてしまいます。授業に対する学生の目的意識やモチベーションが薄れてしまいます。このような状態では、学生は、授業を通しての学びや成長実感などが得られにくくなってしまいます。このような授業は、むしろ学問に対する学生の興味関心を阻害してしまうことにもつながりかねません。学生のレディネスを把握し、授業の目標(ゴール)を明確にし、目標(ゴール)から逆算して授業の構成を工夫してほしいです。一回一回の授業を大切にしてほしいです。

学生の声ーインタビュー調査からー

- 授業の最初とかに先生が手品とか、授業の最初とかに先生が手品とかなんか意味わからん話とか･･･、なんか意味分からん話とかをするけど、なんかそれも面白いよ。それがなんか結局、授業の核心につながっていくみたいな話だったりとか。(B さん)

- (15 回の授業に)1 回も行かんかったんよ 1 回も出られんかったんよ。でも最後にレポートを出しただけで良がもらえたんよ。大学生の授業として、大学のシステム的に「これ大丈夫か？」っていう。実質そこでな、マジで何も学ばんかった。(D さん)

- 知識系の授業であっても、こっちが面白いと思って、主体的に聞いてる感があって、後からなるほどなって思えるのであれば…べつに講義系でも僕はいいと思っていて。話し方がうまい。それからしっかり知識があって、順序だっている。この辺を最低限として、それで面白い話をしてくれるんだったら、僕はそれだけでアクティブラーニングと言われるような主体的な学びは、生徒の姿勢にもよるけど、できると思ってて。(G さん)

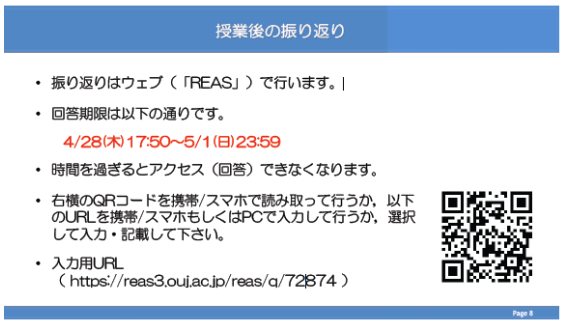
【5 つの要素を含んだ授業実践例】

－学生にとって「よりよい授業」に必要な 5 つの要素は分かったものの、「具体的にどのように授業をアップデートしたらいいのか」「実際に授業でどんな工夫がされているのか」といったことに悩む人もいらっしゃるのではないでしょうか。そのような声に対して、学生なりに考えたことをこれからお伝えします。ここでは、「カリキュラム開発論」の授業で行われた「振り返りとフィードバック」の実践例について、具体的な方法と「なぜそれが学生にとって良かったのか」ということを紹介したいと思います。

《カリキュラム開発論で行われた「振り返りとフィードバックの実践例」》

○振り返り

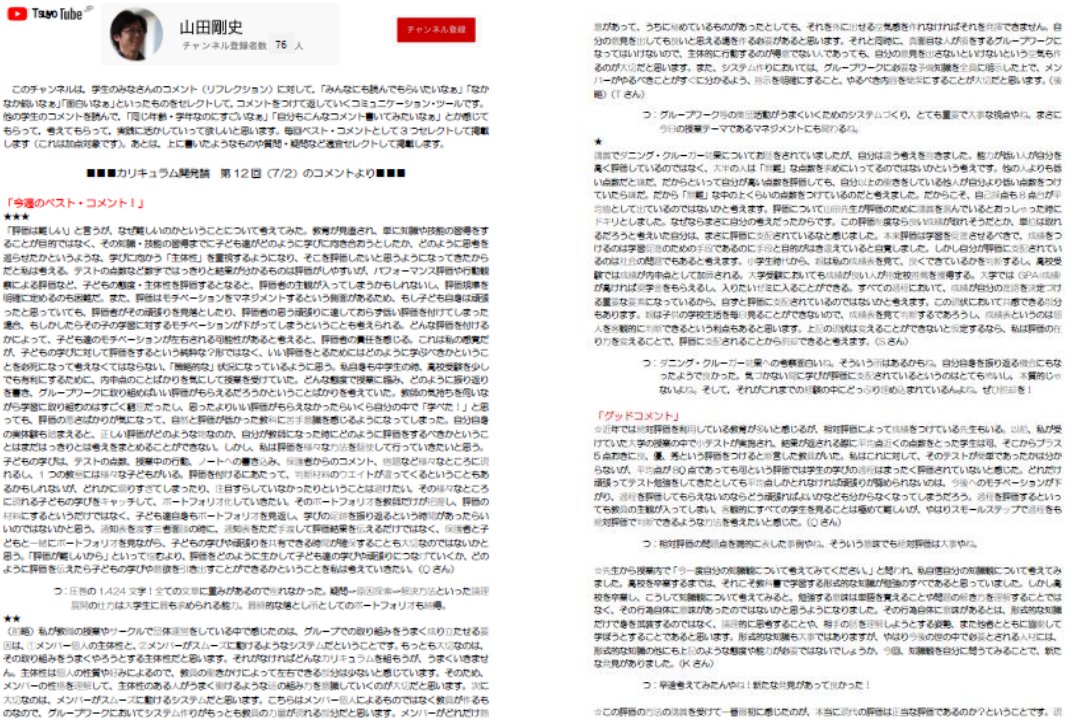
授業終了後から 3 日後の 23 時 59 分までに、授業で使用されたパワーポイントに載っている QR コードまたはリンクからアクセスし、スマホやパソコンから振り返りを入力し、授業者に提出します。振り返りには、授業の感想と質問を入力します。この 2 つの項目の他に、授業に対して「興味を持てたか」「主体的に参加したか」「深く考えられたか」ということを 4 段階で入力し、振り返りにかけた時間も入力します。



←2022 年度第 4 回講義用資料より

○フィードバック

「TsuyoTube(学生が書いた振り返りの一部をピックアップし、教員のコメントを付けてまとめたもの)」を用いて、次の授業の時間の冒頭に、約 30 分間、フィードバックが行われました。学生が書いた振り返りのコメントのうち、興味深いところやその理由、学生の考えに対する教員のコメントなどを加えながら一部の学生の振り返りが紹介されます。振り返りの内容に対するコメントだけではなく、思考の深め方、他の知識との関連付け方なども教員からコメントされます。また、紹介された学生のコメントを受けて、他の学生がどう考えるかという問いかけが行われたり、ディスカッションをする機会が設けられたりしました。



TsuyoTube

山田剛史

チャンネル登録数 76 人

チャンネル登録

このチャンネルは、学生のみなさんのコメント（リフレクション）に対して、「みんなにも読んでもらいたいなぁ」「なかなか鋭いなぁ」「面白いなぁ」といったものをピックアップしてコメントをつけて返していくコミュニケーション・ツールです。他の学生のコメントを読んで、「同じ年齢・学年なのにすごいなぁ」「自分もこんなコメント書いてみたいなぁ」と刺激してもらって、考えてもらって、実践に活かしていって欲しいと思います。毎回ベスト・コメントとして3つセレクトして掲載します（これは加点対象です）。あとは、上に書いたような中の質問・疑問などを適宜セレクトして掲載します。

■■■カリキュラム開発論　第12回（7/2）のコメントより■■■

「今週のベスト・コメント！」

★★★

「評価は難しい」と言うが、なぜ難しいのかということについて考えてみた。教育が発達され、単に知識や技能の習得をすることが目的ではなく、その知識・技能の習得までに子ども達がどのように学びに向き合おうとしたか、どのように思考を巡らせたかというような、学びに向かう「主体性」を重視するようになり、そこを評価したいと思うようになってきたからだと私は考える。テストの点数など数字ではっきりと結果が分かるものの評価がしやすい、パフォーマンス評価や行動観察による評価など、子どもの態度・主体性を評価するとなると、評価者の主観が入ってしまうかもしれないし、評価規準を明確に定めるのも困難だ。また、評価はモチベーションをマネジメントするという側面があるため、もし子ども自身は頑張ったと思っていても、評価者がその頑張りを見届けとしたり、評価者の思う頑張りに達しておらず低い評価を付けてしまった場合、もしかしたらその子の学習に対するモチベーションが下がってしまうということも考えられる。どんな評価を付けるかによって、子ども達のモチベーションが左右される可能性があると考えると、評価者の責任を感じる。これは私の感覚だが、子どもの学びに対して評価をするという純粋な行為ではなく、いい評価をとるためにはどのように学ぶべきかということを必死になって考えなくてはならない「無駄的な」状況になっているように思う。私自身も中学生の時、高校受験を少しでも有利にするために、内申点のことばかりを気にして授業を受けていた。どんな態度で授業に臨み、どのように振り返りを書き、グループワークに取り組めばいい評価がもらえるだろうかということばかりを考えていた。教師の気持ちを思いながら学習に取り組むのはすごく難しかったし、思ったよりいい評価がもらえなかったらいくら自分の中で「学べた！」と思っても、評価の厳さばかりが気になって、自然と評価が低かった教科に苦手意識を感じるようになってしまった。自分自身の実体験も踏まえると、正しい評価がどのようなものか、自分が教師になった時にどのように評価をすべきかということはまだはっきりとは考えをまとめることができない。しかし、私は評価を様々な方法を駆使して行っていきたいと思う。子どもの学び方、テストの点数、授業中の行動、ノートへの書き込み、保護者からのコメント、他国など様々なところに現れる、1つの教科には様々な子どもがいる。評価を付けるにあたって、判断材料のウエイトが置いてくるようにしたいと思うあまりもしれないが、どれかに偏りすぎてしまったり、注目するしていなかったりということは避けたい。その様々なところに現れる子どもの学びをキャッチして、ポートフォリオ化していきたい。そのポートフォリオを教師だけが把握し、評価の材料にするというだけではなく、子ども達自身もポートフォリオを見返し、学びの足跡を振り返るという時間があったらいいのではないかと思う。通知表を渡す三者面談の時に、通知表をただ手渡して評価結果を伝えるだけではなく、保護者と子どもと一緒にポートフォリオを見ながら、子どもの学びや成長りを共有できる時間が確保することも大切なのではないかと思う。「評価が難しいから」といって諦めより、評価をどのように生かして子ども達の学びや成長りにつなげていくか、どのように評価を伝えたら子どもの学びや意欲を引き出すことができるかということを私は考えていきたい。（O さん）

コ：圧巻の1,424文字！全ての文章に重みがあるのでどれもかった。結局→協同授業→解決方法といった論理展開の仕方は大学生に求められる能力。説得的な語とし所としてのポートフォリオも興味。

★★

（後略）私が教師の授業やサークルで団体運営をしている中で感じたのは、グループでの取り組みをうまく成功させる要因は、①メンバー個人の主体性と、②メンバーがスムーズに動けるようなシステムだということです。もっとも大切なのは、その取り組みをうまくやろうとする主体性だと思います。それがなければどんなカリキュラムを組もうが、うまくいきません。主体性は個人の性質や好みによるので、教員の働きかけによって左右できる部分は少ないと思います。そのため、メンバーの性格を理解して、主体性のある人がうまく動けるような組み力を意識していくのが大切だと思います。次に大切なのは、メンバーがスムーズに動けるシステムだと思います。こちらはメンバー個人によるものではなく教員が作るものなので、グループワークにおいてシステム作りがもっとも教員の力量が問われる部分だと思います。メンバーがどれだけ熱意があって、うちに秘めているものがあったとしても、それを外に出せる安心感を作れなければそれを発揮できません。自分の意見を出しても怒られと思える適当な雰囲気があると思います。それと同時に、責任感な人が偏をするグループワークになってはいけないので、主体的に行動するのが難しくない人であっても、自分の意見を出さないといけないという安心感も作るのが大切だと思います。また、システム作りにおいては、グループワークに必要な予知調整を全員に周知した上で、メンバーがやるべきことがすぐに分かるよう、期限を明確にすること、やるべき内容を明示にすることが大切だと思います。（後略）（T さん）

コ：グループワークの実践活動がうまくいくためのシステムづくり、とても重要で大事な視点やね。まさに今日の授業テーマであるマネジメントにも関わるね。

★

講義でダニング・クルーガー効果についてお話をされていましたが、自分は逆ら考えを思いました。能力が低い人が自分を高く評価しているのではなく、大半の人は「無難」な点数を求めにいってるのではないかという考えです。他の人よりも低い点数だと嫌だ、だからといって自分が高い点数を評価しても、自分以上の頑張りしている他人が自分より低い点数をつけていたら嫌だ。だから「無難」な中のよくらいの点数をつけているのだと考えました。だからこそ、自己評価も8点が平均値として出ているのではないかと考えます。評価について山田先生が評価のために講義を組んでいるとおっしゃった時にドキリとしました。なぜならきっと自分の考えだったからです。この評価が後ならば低い成績が取れそうだと、単位は取れるだろうと考えいた自分は、まさに評価に支配されていると思いました。本来評価は学習を促進させるべきで、成績をつけるのは学習促進のための手段であるのに手段と目的が入き違えていると自覚しました。しかし自分が評価に支配されているのは社会の問題でもあると考えます。小学生時代から、お母様の成績表を見て、良くできているかを判断するし、高校受験では成績が内申点として加味される。入学受験においても成績が低い人が推薦成績を獲得する。大学では（GPA成績）が高ければ学費免もらえるし、入りたい学部に入ることができる。すべての過程において、成績が自分の進路を決定づける重要な要素になっているから、自己評価に支配されているのではないかと考えます。この現状において問題できる部分もあります。成績が本人の学校生活を反映しているとができないので、成績表を見て判断するであろうし、成績表というのは個人を客観的に判断できるという利点もあると思います。上記の現状は変えることができないと仮定する場合、私は評価の在り方を変えることで、評価に支配されることから解放できると考えます。（S さん）

コ：ダニング・クルーガー効果への考察面白いね。そういう所はあるのかな。自分自身を振り返る機会にもなったようで良かった。気づかない間に学び方が評価に支配されているというのはとても怖いし、本質的じゃないよね。そして、それがこれまでの経験の中にどっぷり浸かり込まれているんよね。ぜひ頑張る！

「グッドコメント」

☆近年では絶対評価を利用している教育が多いと感じるが、相対評価によって成績をつけている先生もいる。以前、私が受けていた大学の授業の中で小テストが実施され、結果が返される際に平均点近くの点数をとった学生は母、そこからプラス5点おきに母。優、秀という評価をつけると宣言した教員がいた。私はこれに対して、そのテストが難度であったかは分からないが、平均点が80点であっても母という評価では学生の学びの過程はまったく評価されていないと感じた。どれだけ頑張ってテスト勉強をしてきたとしても平均点以かとれなければ頑張りが報われないのは、今後への モチベーションが下がり、過程を評価してもらえないのならどう頑張ればいいのなども分からなくなってしまうだろう。過程を評価するといっても教員の主観が入ってしまい、客観的にすべての学生を見ることは極めて難しいが、やはりスモールステップで過程をも絶対評価で判断できるような方法を考えたいと思った。（O さん）

コ：相対評価の問題点を鋭的に挙げた事例やね。そういう現状でも絶対評価は大事やね。

☆先生から授業内で「今一度自分の知識観について考えてみてください」と問われ、私自信自分の知識観について考えてみました。高校を卒業するまでは、それこそ教科書で学習する形式的な知識が勉強のすべてであると思っていました。しかし高校を卒業し、こうして知識観について考えてみると、勉強する目的は単語を覚えることや問題の解き方を習得することではなく、その行為自体に意味があったのではないかと思うようになりました。その行為自体に意味があるとは、形式的な知識だけで身を装備するのではなく、論理的に思考することや、相手の話を理解しようとする姿勢、また他者とともに協働して学ぼうとすることであると思います。形式的な知識も大事ではありますが、やはり今後の世の中で必要とされる人材には、形式的な知識の他にもお上のような態度や能力が必要ではないでしょうか。今回、知識観を自分に問うてみることで、新たな共見がありました。（K さん）

コ：発達考えてみたんやね！新たな共見があって良かった！

☆この評価の方法の講義を受けて一番後初に感じたのが、本当に現代の評価は正当な評価できるのか？ということです。現

↑フィードバックの際に用いられた教材「TsuyoTube」

（2021 年度第 13 回授業時に配布されたものより）

＊授業者視点で、この「振り返りとフィードバックの実践例」を具体的に紹介している論文もあります。ぜひご覧下さい。

特集

特集　オンライン授業の学修評価と試験方法

ニューノーマルな教育として、対面と遠隔を組み合わせたハイブリッド型授業が模索され、普及しつつあります。全て対面で授業しなくても、遠隔・オンライン授業を効果的に導入することで、学修効果の向上が見られるようになり、学修者一人ひとりの能力の伸長が期待できるようになってきました。

学修者本位の教育の実現と学びの質向上に向けて教育のDX対応受けることのないよう、授業改善の研究が進められていますが、他方、学びの質保証の観点から、遠隔・オンライン授業による学修評価の方法と測定の方法について、教員一人ひとりが授業形態に応じて評価の信頼性を担保しつつ適切な学修評価を行えることが望まれます。

そのような観点から、オンライン授業の学修評価とその試験方法の在り方について考える場としました。

オンライン授業による学修評価をどう考え、実践するか
～振り返りとフィードバックを中心とした実践事例の紹介～

関西大学
教育推進部教授　山田　剛史

1．はじめに～問題の所在～

コロナ禍も3年目に入り、オンライン授業に関する試行錯誤から、私たち大学人は多くの学びや気づき、実践上のスキルを得ることとなりました。オンライン授業のために、相当の時間をかけて教材制作や動画制作などの準備を行い、オンライン会議ツールや大学独自のLMS、汎用的なICTツールなどを駆使しながら、授業に臨んできました。各大学では、オンライン授業に関する各種調査や教学データの分析も行われ、そのメリットやデメリットなどが議論されてきました。オンライン授業の利点を集約すると、「時間的・物理的制約を超えて受講でき、自分のペースで学習できる」ところにあります。

一方、自分のペースで学習するためには、対面時以上に学びに対するモチベーションの喚起・維持が必要になります。若い学習者にとって、誘惑の多い自由度の高い環境で、独力で自主的に学びに向かい続けることは容易ではありません。教員も学生の理解度が把握しづらくなるため、あの手この手で学生の学習状況を把握し、学習成果を高めようとします。その方策の1つとして、対面時以上に多くの課題を課すこととなります。その結果、「学生が勉強するようになった」という声も聞きますが、ベネッセ教育総合研究所が2021年12月に行った「第4回大学生の学習・生活実態調査」によると、学生の授業外学習時間はコロナ禍以前と比べてほとんど増えていないという結果も出ています。

このたびのコロナ禍の経験、とりわけオンライン授業の意義や可能性をどう捉え、これからの大学教育にいかすことができるでしょうか。様々な観点がありますが、「授業をどう提供するか」といった点については、リアルタイムやオンデマンドなど提供方式によって使用ツールの違いはありますが、使っていれば慣れていきます。自分のやりやすいスタイルも見えてきます。対面と比べて、できることできないこと、やりやすいことやりにくいことの違いはありますが、授業（主に知識）を提供すること自体にそう大きな変化はないように感じます（当然、実験・実習・実技などは大きく異なります）。

他方、大学人を最も悩ませたのが学習評価だと言えます。授業の締め括りとして、教員は学生の学習活動・成果について評価を行い、成績をつける（単位を付与する）という営みを行います。多くの場合、知識の多寡を問うための客観テストや、知識理解の深さを見るための論述テストといった方法を採用し、教員による監督の下、教室内で一斉に実施し、その結果をもとに評価を行います。コロナ禍でこれができなくなったのです。実施自体は可能ですが、学生の状況が見えないため、不正行為を検出することが困難になりました。オンライン試験において不正行為を行うことを防ぐため視聴を遮げたり、授業で扱うトピックに絞めたりしていくと良質なフィードバックとなります。LMSの掲示板機能等を使うことで効率的に行うことも可能です。

Q2. 大規模科目（例えば150名以上）でそれなことができるのか

可能です。ただし、それだけ多いと一人ひとりの存在を感じていてはきりがありません。ざっと見て、目についたものを拾うのでも十分だと思います。それもなかなか大変ということであれば、質問欄を設けておき、次週冒頭でその中のいくつかにリプライするというのでも良いかと思います。いずれにせよ、学生に「先生は見てくれていないんじゃないか」と思わせないことが大事です。ICTを活用することで振り返りを効果的に実施し（印刷・配布・回収なし）、効率的に情報を集約し（ソート等）、機能に活用する（コピペ等）ことができます。

Q3. たとえできたとしても、負担が大きすぎる（多くの科目を担当しており、そこまでできない）

負担という言葉では、やらないのが一番楽なわけですが、学生の学びの質向上のためには、どうすれば負担を軽減しつつ持続的に実施できるか、を考えていくことが肝要です。1つは、そもそも全ての科目で、毎回扱うことはしないという考え方です。扱すだけであればいくらでもできますが、フィードバックまで組み込むことを前提として、学生に課す順度やボリュームをコントロールするということが大切です。いま1つは、ICTを活用するということです。活用した方がいいというより、活用しないといけないくらいだと思っています。

最後に、共通して言えることは、評価を厳密にしようとしすぎないこと、完璧にしようとしすぎないこと、絶対視しないことだと考えます。評価が自己目的化し、学生の学習活動・内容が軽視されては元も子もありません。常に問い続けるべきは、「学習者が主体的に学びの過程に関与できているか」であって、評価はそのための潤滑油であるということです。

5．振り返りとフィードバックに関する実践例

ここからは筆者の実践例、特に、毎回の授業後の振り返りとそれに対するフィードバックを中心に取り上げたいと思います。ここで紹介する取組みは、遠隔・対面に関わらず、基本この授業でも実践していますが、遠隔・対面が混在していた2021年度（春学期・秋学期）の授業を例に取り上げます。

（1）振り返りの方法

授業の振り返りを入力するためのフォームを予め用意し（筆者は「REAS」というフリーのツールを使っています）、授業の配布資料にURLとQRコードを掲載しておきます。学生は授業終了後から3日後の23時59分までにアクセスして、振り返りを入力します。振り返りは、授業の「感想」と「質問」が基本です。2022年度からは、この2つに加えて、興味を持てたか、主体的に参加したか、深く考えられたかに関する質問（いずれも4件法）と、振り返りに要した時間についても聞いています。回答期限後、データをダウンロード

図3　フィードバックシート（「TsuyoTube」）の構成とポイント

4　JUCE Journal 2022年度 No.1

JUCE Journal 2022年度 No.1　7

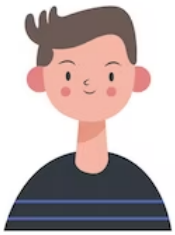
山田剛史(2022)「オンライン授業による学修評価をどう考え、実践するか～振り返りとフィードバックを中心とした実践事例の紹介～」『大学教育と情報』2022 年度 No.1 pp.4-9

《「カリキュラム開発論」の授業の「振り返りとフィードバック」に対する学生の声》

Aさん

僕はフィードバックの時間が結構好きで。自分の考えを整理できてたので。フィードバックの仕方とかって人それぞれじゃないですか。それも意見交換じゃないですけど人のフィードバックの仕方を見れるっていうのが面白かったですし、良いリフレッシュになってました。なかなか他の授業ではあんまりないので。いろんな人の意見を聞けるっていうのもそうですし、それに対する先生の見解とかも聞けるので、大変貴重な場かなという風には思ってました。

何回か(自分の振り返りが)発表されたけ、そこは嬉しかったかな。（略）あと、（嬉しかったのは）俺のことを褒めてくれたこと、それを狙ってたから、はまった時には嬉しかった。他の人のすごい意見も知れたしその点でも良かったと思う。フィードバックはあったほうがいいとは思う。自分が評価されるとか、この先生みたいに(良かった振り返りの一部が紹介されて)「この人がよかった」とか毎回評価される、コメントで評価された人が成績ちょっと上がりますよみたいなのは、「ちゃんと頑張ってこうかな」っていうインセンティブには繋がるんかなって俺は思うけ。評価があったら多少はモチベは高まる。

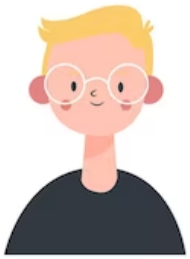


Bさん

Cさん

（TsuyoTube でよく取り上げられている人が)めっちゃ書いててそれに触発されたっていうのがある。書く量が多くなっていったみたいな。自分もそういう人のコメントとかを見て、「すごいな」って。私もこうやって自分が刺激を受けたみたいに、刺激を与える側になりたいなみたいな。私みたいに、そういう感じに思った人が他にもいたから、字数が上がっていったり、中身ももちろん良くなっていたっていう、あの授業に相乗効果をもたらしたコンテンツだったなって思うからすごい良かったなって思う。(フィードバックでモチベが上がったのは)あの授業限定だったかも。他の授業でもミニッツがあったら頑張ろうとかさ。フィードバックをみんなに見せるとかさ。みんなに見てもらいたいとかそういうわけじゃないけどさ、ただ出席確認のためだけのミニッツとかそれをめっちゃ頑張ろうって思ったわけじゃないからさ。あの授業限定ではあったけど、でもあの授業の中ではわりとずっと「書けるときはしっかり書こう」って思ってしっかり書いてたと思う。

振り返りとフィードバックに関しては結構、「ふりかえりに重きを置いてる先生なんやな」っていうことを思ったのも正直あって。「一方通行の授業じゃないんだな」っていうのはすごく思えたし、多分それで(先生が)「(フィードバックの時間が)全然時間足りひんわあ！」っていうのになってた気がする。気がするけど、「でも(先生が)やりたいことってそういうことなんやな」「双方向な授業をしたいんやな」っていうのも伝わった。でも、(先生が取り上げた振り返りって)結構ネガティブな意見とかも多かったやん。必ずしも「ここがいいと思いました」っていうところだけじゃなくって、「僕はこう思いました」とか(先生とは違う意見とかも取り上げられてて)。周りの人のレベル高いなあって思ったけど。フィードバックを見て「この人(他の学生は)こんだけ書いてるんやな」とか思った。「すごいなこの人ら」って。「そんなに真摯に向き合えるんや」っていうところはすごい思いました。

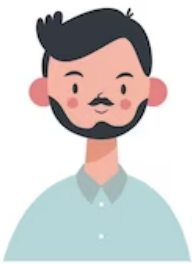


Ｄさん

Ｅさん

おれは(振り返りを書くことを)たまーにやってた。いや結構やってて、たまーに忘れちゃうかなみたいな笑笑。それだけはやっとったかもしれん。単位でんから。俺がよくやってたのは、一番最初のスライドに何かが書いてあるからそれをまずタイトルを写して、これでも文字数稼げるから。スライドの内容をちょっとずつちょっとずつかいつまんで、僕はこう思うかなーってさ。

皆たくさん書いてるなあって、触発されてた部分は絶対あるんですけど、ただなんか、僕は割と授業の内容に対して単発単発で自分の考えを書くっていうのが多かったんで。もちろん(他の人の)影響を受けて、内容とかではなく、雰囲気で文量は増えてました。それこそ初回確か、４００くらいでしゃしゃっと(振り返りを)書いてて。(フィードバックの時に他の人が書いている文字数が)皆ボーンで１６００。ああ、もうちょっと書いていいんだなみたいな。



Ｆさん

Ｇさん

特にこの教職系の、特にカリキュラム開発論って答えのない問いというか。答えあるんだろうけど。いろんな意見があってしかるべきものだから、何だろう、課題の質としても、ある程度の答えがあってみんながその答えに近い似たようなレポートを提出するわけじゃなくて。人によって意見が違うって言うものだから、なおさらそれは読みごたえがあり良かったなと。やっぱり自分の意見、フィードバックが無かったら僕の意見は考えられなかったなっていうのはあって。だから他の人の意見があったから、「いや、これは違うだろう」とか「これはなるほど、そうだな」とか。それに対して、自分の論の補強をして次のフィードバックで書く。っていうことができたから、なんだろう。それがないと、やっぱり論語の「思いて直庭座れば即ち危うし」みたいな。自分で考えてるだけだったら、ちょっとどん詰まりになるけど、他の人の意見があるから、まあ余計考えられるっていうのは。多分僕初回で一番文字数書いてた自信あるんですけど。なんか先生言ってなかったっけ？初回で1,300ぐらい書いてる人がいる、みたいな。あれはまあ僕が書いてたんだけど。でもなんか、その次とか、その次の回。何回目だったかな？全然僕の量を越してくる人とか、全然僕よりも内容濃いことを書いてくる人間がいっぱいいて、それがすっごい嬉しかったですね。あれは、フィードバックがあったから、皆「そんなに書いていいんだ！」とか。「そんなとがったこと言うんだ。」みたいに、もし触発されてくれていたんだったらすごい僕は嬉しいし、それは僕にも刺激になったね。

《「振り返りとフィードバック」に対する学生の声―グループインタビューー》

「カリキュラム開発論」のフィードバックに関してはどうかな？
フィードバックで学びって深まるもんなんかなあ。

私は自分が全然、考えを書けやんタイプで。そういうの結構苦手で。だから「こんなにすごい人がおるんや。じゃあ自分頑張ろう」ってゆう方に変わったかな。「そういうのを書いてる人がおる」っていうことで、焦りって言ったら表現はおかしいけど何もないよりは、自分がもっと頑張らな頑張らなっていう気持ちにはさせられたかな。

Ｊさん

自分もそうかな。先生が実際に、「皆さんの同期でこれだけ考えを深めてかける人がいるんですがどう思いますか」って言ったときに、「うわやばいな」と思って。私も焦りじゃないけど、「こんなことをしてていいんかな」って思ったし、「もっと書けるよな」ってスイッチが入ったなって思う。フィードバックで。「もうちょっと頑張ろうかな」とか。「プラスアルファ調べてやれるな」とか思えたから、他の人の意見を聞いたりはもちろん自分のプラスになったけど、それ以上に取り組み方みたいなの、姿勢を変えることに繋がったなって思う。

Ｉさん

間違いないな。「自分なりにベストを尽くそう」て思った。(TsuyoTube に取り上げられている人みたいに)いっぱいかけるわけではないけど、私も書くのが苦手っていうのは前からわかってたから、「今努力してもあれぐらいは書けないけど、ちゃんと自分なりにベストを尽くせば先生見てくれるかな」って思ってた。

Ｈさん

あーなるほどな。じゃあやっぱり振り返りの内容に共感するっていうよりは「こんだけ書かなあかんのや」っていう、「取り組み方」の方がメインなのかな。内容…。どっちやろ。内容も割と刺激を受ける？

うん。

３人

「その考え方に共感」みたいな感じは受けるけど、それ以上に取り組み方とかのほうが刺激が大きいってことかな？

どっちもありそうやけどな。

Ｉさん

その人のレベルによる。

Ｊさん

初見で見たら、取り組みの方になるくない？

Ｈさん

あーそうやね。初見でみたらね。

Ｊさん

まぁ最初はそうよね多分。あーそういうことか。「取り組む姿勢」から変化していくんかもね。

先生が文字数の変化も出してくれてたじゃん。(授業の回が進む毎に)振り返りの文字数が伸びてるのって、やっぱり「自分もやらなきゃ」て思った人が多いからかなって思うし。そっからだんだん、「やらな」ていうところから自分の意見を書く方にシフトしていって、広げていく方に繋がっていくのかなって感じる。みんなそうやったかなって思う。どんどん増えてたから。たぶん本当に書けないっていうかめんどくさいと思う人は一定数いたと思うけど、そういう人は焦るというか、「マジで嫌やわ」って思うような振り返りだったんじゃないかなって思うかな。そういう人を配慮する必要はないと思うけど。ね。一定数いるじゃない？

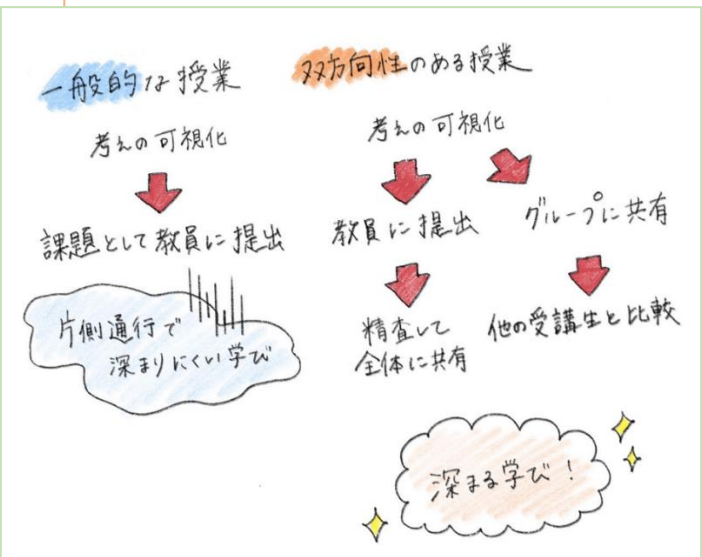
Ｉさん

《「振り返りとフィードバック」の効果について見えてきたこと》

これら学生の声から、「カリキュラム開発論」の授業における「振り返りとフィードバック」には、学生にとって「よりよい授業」に必要な 5 つの要素がすべて含まれていることがわかります。自分の振り返りが取り上げられて褒められた、どのような内容であっても先生が見てくれている、などといった「心理的安全性」が保証されています。また、たとえネガティブな意見であっても、先生側が必ずしも「ここがいいと思いました」だけではなく、学生からの異なる意見に対してもしっかり受け止め、「僕はこう思いました」と自分の意見を発信する「双方向性」が取り入れられています。さらに、フィードバックを通して、さまざまな人の意見が聞けたり、それに触発されてさらに深く考えるための刺激になったりという「多様性」も尊重されています。他の人の意見を聞く機会を通して、自分の考えの補強をおこなうなどの「思考をする場面」が組み込まれています。先生は、振り返りに重きを置き、学生の考えを授業に生かすというような「授業展開」を工夫しており、その効果が受講していた学生にも伝わっているようでした。

授業中の学生の様子をみてみると、学生は、このフィードバックの時間でいろいろな人の考えに触れ、メモを残しながら自分の考えをブラッシュアップさせたり、改めて自分の考えを整理する時間にしたりしていました。いろいろな人の考えに触れることで自身の考えが深まることはもちろん、他の人の頑張りに触発されたり、学びへのモチベーションが高まったりした学生が多く見られました。これをきっかけに授業中のディスカッションに積極的に参加したり、授業に集中したりする学生の姿もみられました。

振り返りとフィードバックが、この授業の良い潤滑油になっているようでした。



【Q＆A】

―教員の方々が学生に対して疑問に思うだろうこと(Q)に対して、私たちが学生目線で回答しました。もちろん、あくまで私たちの考えであるため、全ての学生の考えにあてはまるというわけではありません。

Q1. 学生の声を聴きたいけど、どうすればいいのかわからない。

本当は想いを持っていて、想いを伝えたいと思っている学生はいます。しかし、「どこに言えばいいのかわからない」「学生の声なんて受け入れてもらえないのではないか」ということから、想いを伝えられずじまいで終わってしまう学生もいます。

授業アンケートで学生の声を求められることもありますが、授業アンケートは現段階ではあまり学生の声を聴くことができていなように思います。そもそも授業アンケートに回答することに対してめんどくささを感じている学生もいますし、「教員や職員に読まれて、成績や単位取得に悪影響がでるかもしれない」と思い、本音を書くことにためらいを感じる学生もいるようです。学生の声を聴くのが難しいように、学生側からすれば、学生の声を伝える・届けるということも実はとても難しいのです。

だから、まずは信頼関係を構築し、想いをフラットに伝え合える関係作りをすることが大切だと考えます。しかし、これはとても時間がかかることで、難しいことだと思います。そこで私たちは、私たち学生にできることとして、「学生が学生の声を聴く」という、今回のような方法をとりました。

Q2. 学生に意見を求めても何も言わない、何か話を振ると下を向いてしまうということがよくあるのだが。

人前で自分の考えを発言することに勇気がいる学生も存在します。「間違ったことを言ってしまったらどうしよう」「目立ちたくないのに」といったマイナスな感情が働いてしまい、先生に当てられるとなれば、とっさに顔を下げてしまいます。また、学生の中には大学の先生のことを「すごすぎて近寄りがたい存在」と思っている人もいます。ある学生は、先生のことを「神様みたい」と表現していました。研究のスペシャリストである先生に対して、自分の考えを伝える、気軽にコミュニケーションをとるということはなかなかハードルが高いことのようです。

また、授業の内容についていけておらず、先生に何かを問われてもちんぷんかんぷんであったり、そもそも授業に気持ちが乗っておらず話すらも聴いていない学生がいることも大いにあります。まずは意見の求め方を振り返ったり、学生が意見を持っているのか様子を伺うなど、学生の状況を把握してみることが大切なのではないでしょうか。

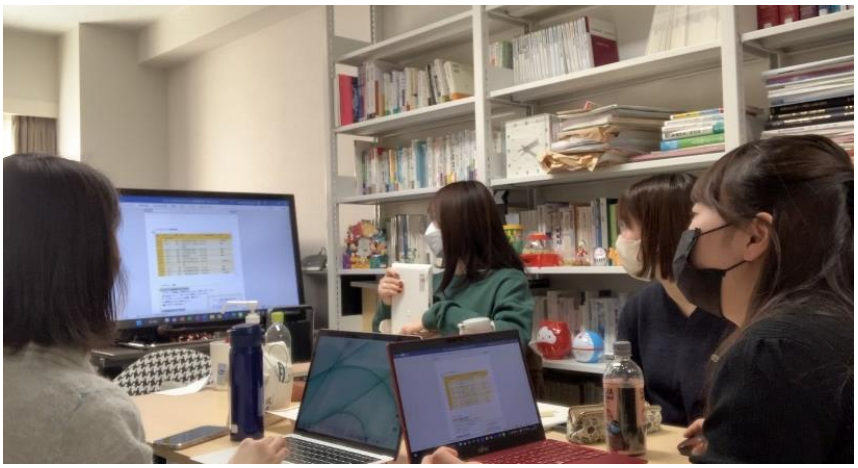
Q3.「楽しい」だけの授業でいいのか。知識技能を教えることも必要では。

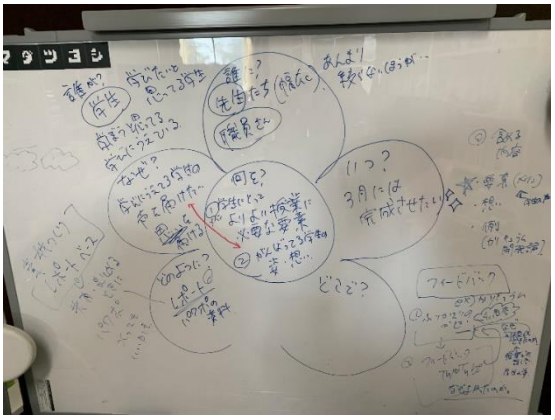
知識技能の習得はもちろん大事なことです。しかし、知識技能を一方向的に教えるということには問題があるように感じます。テストや単位取得のために、無理矢理・必死に詰め込んだ知識技能は、目先の目標が達成されれば、忘れ去られてしまいます。

そこでまずは、学生が興味を持って、授業に「参加したい」「関与したい」と思えるような授業を行うことが大切だと考えます。学生が主体となって授業に参加し、いろいろなことを考えたり、他の人と議論したり、活動をしたりしていくうちに、「楽しい」という感情が芽生えていきます。「楽しい」「やってみたい」が、学びの原動力になります。学生自身が積極的に関わった上で得られる学びは、単なる知識技能のインプットによって得られる学びよりも深く、学生の身になるものだと考えます。

Q4. 学ぶ意欲のある学生ばかりではないのでは。

もちろんその通りです。このレポートの作成に関わっている学生は、比較的、学ぶ意欲がある学生の部類に入るでしょう。他にも、学ぶ意欲や成長意欲を内に秘めているにもかかわらず、なかなか発揮することができていない学生も実はたくさんいるということが、本レポートの作成やMOCAの活動を通して分かってきました。様々な学生がいるということを頭に入れた上で、様々な学生を巻き込めるようなアプローチを今後考えていきたいと思っています。





【おわりに】

「学習者中心の教育」ということが様々なところで言われています。「学生がよりよく学び、成長するためにはどうしたらいいか」というように、「学生」を主語に、高等教育がどんどんアップデートされてきているように感じます。

これからの高等教育をよりよくするためには、教職員の方々の頑張りはもちろん必要です。それと同時に、学びの中心にいる学生も、自分たちの学びに責任をもち、よりよく学び・成長していこうとすることが大切なのではないかと考えています。教職員と学生との相互作用により、今の高等教育がより良い方向に変わっていくとはずだと信じています。

そこで、学生がよりよく学び、成長するために「学生に何ができるか」ということを考え抜いた結果、このレポートを作成することとなりました。学生の声を踏まえ、学生にとってより良い授業作りをするためのヒントを記しました。今の大学の授業や、教職員の方々に学生からの不満を一方向的にぶつけたいというのではありません。学生一人ひとりがよりよく学び、成長するためにはどうすればいいのかということを、私たち学生も一緒に考えていきたいのです。

インタビューをした時に、このようなことを話してくれた学生がいました。

> 俺こういうインタビュー興味ないんやん？だって俺らみたいなやつの意見は無いと思ってるから。例えば、学校は「私たちは学生みんなの意見を聞いてこうします」っていう時ってだいたい真面目な子の。俺たちの意見は無いと思ってるから。

「意欲のある学生ばかりではない」「学生の声がなかなか聞こえてこない」「学生の様子が見えない」という言葉を耳にすることがあります。たしかに、大学には様々な学生が存在します。多様な学生を正確に捉えきることは難しいことです。しかし、目の前の学生のことを正確に捉えようとすること、見ようとすること、コミュニケーションをとろうとすること、このような「想い」があれば、何か少しでも変わっていくのではないでしょうか。学生の様子が見えないから目をつむる、自分にとって都合が悪い学生の声に対しては聞こえないふりをする、これでは何も変わらないのではないでしょうか。

私たちのような強い想いを持った学生達は他にもたくさんいますし、もちろんそうではない学生もたくさんいます。私たちは一学習者として、学習者中心の教育を実現するための強い「想い」を、まずはこのレポートを手に取ってくださった方々に届けたいと思います。

このレポートを作成するにあたって、アドバイスをしてくださった山田先生を始め、インタビューに快く応じてくれた関西大学の学生のみなさま、レポートの完成を楽しみにしていてくださっていた方々などたくさんの方々にご協力いただきました。心より感謝しています。ありがとうございました。

2023 年 3 月 9 日　　MOCA 代表　奥村百香

MOCA（Meet On Creative Academy）の紹介

「学生の学びについて学生自身が考え、行動に移すことができるようなチームが大学に必要ではないか」という想いから結成したユニットです。

「学び」「成長」に全力な関大４回生４人と先生で構成されています。

学生のよりよい学びのために、教職員や他の学生などさまざまな人と関わりながら活動しています。

－活動内容－

2022 年３月
MOCA 発足

2022 年４月～7 月
関西大学春学期開講教職授業「カリキュラム開発論」の授業に参加し、観察・フィールドノートの作成・受講生への支援などを行い、これらを踏まえて授業者へのフィードバックを実施。

2022 年９月
「よりよい授業とは何か」「授業改善に必要なことは何か」ということを、学生の声を取り入れて考えたいという想いから、2021 年度・2022 年度の「カリキュラム開発論」の受講生を対象とした、インタビュー調査を実施。

2023 年３月
インタビュー調査の結果をまとめたレポートの発行（本レポート）。

2023 年３月
2022 年度卒業生を対象とした交流会・学びの会（こみゅREば）の開催。

－メンバー－

○　奥村百香（文学部　初等教育学専修　４年生）
○　岡本碧梨（文学部　初等教育学専修　４年生）
○　井上優（文学部　国語国文学専修　４年生）
○　中谷汐里（文学部　教育文化専修　４年生）
（2022年度時点）

○顧問
山田剛史（教育推進部　教授）

★HP
http://yamatuyo.com/education.html

★Instagram
@MOCA_MEET_ON_CREATIVE_ACADEMY_

https://www.instagram.com/moca_meet_on_creative_academy_/